

第6回 ニッケピュアールト エッセー大賞

<高校の部 大賞>

「生命のくさり」

板谷崇央

どこからか入ってきた小さなアリがノートの上を歩いている。よく見ると呼吸のためか少し上下にゆれている。時々何か考えるように触角を動かし、まわりを見渡した歩く。こんな二ミリ位の生物のどこにそんな色々な動きのしくみが備わっているのか。

生きていることってどういうことだろう。それに死ぬってどういうことだろう。私の祖父は死んでしまったが、私の顔や性格は祖父に似ているとよく言われる。手や足や血の中にそのまま生き続けている。

私は本当は何歳なのか。私は現在十八歳。だけど生命として受け継いできたものの年はいくつだろう。地球上の生命が生まれてから少しずつ進化して、いろいろな生物から受け継いできた生命そのものはずっと死なず、それこそ永遠に永久に生きている。

アリの鉛筆でちょっと触ってみる。アリはあわてて逃げていく。こんな小さな生物に危険なんてわかるのだろうか。他の動くものに自分が触れた時、逃げるようにつくられているのだろうか。逃げないアリは敵に食べられ、逃げるようにつくられたアリだけが残ったのかもしれない。生命というものがそこで受け継がれていくのだろう。

何千年も何万年も何億年もかけて受け継いで守ってきた生命を人はなぜ壊そうとするのだろう。人間以外の動物は自分が食べる分しか殺さない。でも人間は自分の欲望のため、我がままのために人の命を奪う。これはとても恐ろしいことだ。

人間はめったに他の動物に食べられたりはしない。だからいつしか人間だけが他のものを支配してもいいと思っている。でも本当は虫も魚も鳥も植物も、同じ地球時間を過ごした生命である。人間だけが高貴だと考えるのは、私たちの勝手な思い込みだ。地球の仲間として、全てのものに毎日感謝しながら、生命のくさりをつないでいかなければと思う。